

第V章 分析と考察

1 縄文時代の遺物と遺構

(1) 遺 物

① 縄文土器

大湯環状列石からはコンテナ（縦 59 cm × 横 39 cm × 深さ 21 cm）1,235 箱の縄文土器片が出土した。この内、完形土器と復元された土器は 632 点である。その時期は縄文早期から晩期と幅広く、特に後期の出土量は全体の約 95% を占める。

これらは、主に万座・野中堂環状列石周辺(万座地区・野中堂地区)と万座北側の環状配石遺構群周辺(万座北側地区)から出土したものであり、環状列石や遺構密集部から遠ざかるに従いその出土量は希薄となる。一本木後口配石遺構群や万座配石遺構群等からの出土量は少量である。遺構内ではフ拉斯コ状土坑、土坑からの出土が多い。

なお、Ⅲ群土器の分類は漆下遺跡の土器分類をもとに、小保内裕之「陸奥大木系土器」、榎本剛治「十腰内 I 式土器」、鈴木克彦「宝ヶ峯式・手稻式土器」、秋田かな子「加曾利 B 式土器」(いずれも『総覧 縄文土器』に収録)を参考にした。

I 群 早期の土器群(第 95 図 1~2)

早期に位置づけられる貝殻文、貝殻沈線文、沈線文、縄文の施文された土器を一括した。出土範囲は万座北側の台地縁に限定される。これらに伴う遺構は検出されなかった。

1類：山形・平口縁の尖底深鉢が主体となる。貝殻腹縁文を数段重ねて施文するもの、連続移動させ山形文を施文するものがある。また、貝殻の腹縁を上下に移動させ波状文的な文様を施文するもの(1)がある。前二者は寺の沢式、後者は吹切沢式に相当する。

2類：波状、平・山形口縁を呈したキャリパー形の尖底深鉢が主体となる。口唇部断面形が先細りとなるものや方形を呈するものがある。文様帶は胴部上半に限定される。貝殻文と沈線文を組み合わせて幾何学的な文様が施文するもの、沈線の交点や沈線間に刺突文を付加するものもある。物見台式に相当する。

3類：底部の小さい深鉢が主体となる。口縁部形態は不明。沈線で鋸歯状や格子目状等の直線的な文様、沈線と単刻線を組み合わせた矢羽根状文(シダ状)のほか沈線文と刺突文を組み合わせた文様を曲線的に施文するものがある。ムシリ I 式に相当する。

4類：荒い縄文を回転したもの、側面圧痕のものを本類とした。前者は「表裏縄文」と呼んでいるものである。平口縁の尖底深鉢が主体となる。赤御堂式や早稻田 4 類土器に相当する。

側面圧痕が施文される土器は、平口縁で丸底に近い尖底深鉢が主体となる。0 段多条の LR 縄文・RL 縄文が施文される。口唇部はやや肥厚し、外反気味となる。早稻田 5 類土器、表館(1)遺跡第 X 群土器に相当する。

II群 前期の土器(第 95 図 3)

前期に位置づけられる沈線文、押引沈線文、連続する刺突文、縄文が施文された土器を一括した。早期土器群と同様に分布範囲は万座北側の台地縁に限定される。本群土器に伴う遺構は

検出されなかった。

1類：地文上に短い沈線や押引沈線文を施文したものを本類とした。平口縁の深鉢が主体となる。口唇部断面形が丸みを帯びるものと先細りになるものがあり、僅かに外反するものがある。地文として LRL 縄文、RL 縄文が施文され、沈線が口縁部に限定されるものと器全域に及ぶものがある。押引沈線文のものは、胴部上半に文様帶が限定され、地文として結束羽状縄文が施文される。本類は春日町式、早稻田第 6 類土器、表館(1)遺跡第 X V 群土器に相当する。

2類：棒状工具による連続する刺突文を特徴とする。平底の深鉢が主体となる。表館式に相当する。

3類：縄文原体を使用したループ文や縄端圧痕文を特徴とし、羽状縄文や菱形文を施すものもある。器種は深鉢が主体となる。表館式に相当する。

4類：口縁部に絡状体圧痕文を施文するものを一括した。平口縁、山形口縁を呈する深鉢が主体となる。口縁部文様帶は隆帶文によって胴部と区画され、幅の狭いもの、広いものがみられる。胴部には木目状撚糸文や結節羽状縄文が施文されている。本類土器は円筒下層 d 式(第 95 図 3)に相当する。

III群 後期の土器(第 95 図 4～128 図 290)

本遺跡の出土土器の約 95% を占める土器群である。後期初頭から後葉にかけてのものである。遺構外出土が圧倒的に多く、フラスコ状土坑出土資料がそれに次ぐ。出土範囲は万座地区、野中堂地区、万座北側地区で、遺構密集部やその外周から多量に出土した。

遺物包含層は第 IIIa 層～第 IIId 層で、第 91 図～94 図に本群土器の出土分布を示した。

<III群 3類～6類土器の出土分布>

第 91 図～94 図は、III群 3類～6類土器の完形・復元土器の平面分布図である。

万座地区、野中堂地区、万座北側地区ごとに分布状況を説明する。また、遺跡から出土した石器、土製品、石製品のほとんどは III群 3類～6類土器に共伴したものと考えられることから、それ等についても説明する。

<万座地区> 万座環状列石を中心に掘立柱建物跡・土坑・フラスコ状土坑が分布する範囲である。3類土器は列石東側・南東部・西側の遺構密集部の外周から出土している。野中堂地区と比較し出土量は少ない。4類・5類土器の出土分布域は 3類土器と同様であるが、密集部は同地区南東側や西側に広がり、野中堂地区と比べその数量は増加する。6類土器は減少し、その分布は疎らとなる。遺物が多量に出土する範囲を遺物集中域と呼んだ。

なお、3類～6類土器は、万座環状列石北側に位置する SX(S)404 を境に、土器や石器等とともに出土量が希薄となる傾向がみられる。

石器・土製品・石製品は 4類・5類土器の分布範囲と重なり、列石の南東側や西側から多く出土している。石器等のすべてのものがこの地区から出土している。

<野中堂地区> 野中堂環状列石と関連する遺構分布域の外周から出土している。3類土器は北東側・南側から復元土器がまとまって出土するが、北東側が数量的に多い。これは遺構の密集度の違いによるものと考えられる。4類・5類土器は、3類土器と同様の分布範囲を示すが、出土量は減少し、さらに 6類土器に至っては、同類土器を伴う竪穴住居跡が検出されているに

も関わらず、さらに減少していく。

石器は磨石、凹石、敲石が本地区から多く出土する傾向にあり、三脚石器はほとんど出土しない。土製品は万座地区や同北側地区と比較し出土数量は減少するが、飛び抜けて多いとか皆無という遺物はない。石製品では石冠、有孔石製品、三脚石器が本地区では出土せず、万座地区と比べ出土量が極端に減少している。

野中堂環状列石の東側に一本木後口配石遺構群が位置する。調査区 B1 区からは多量の土器等が出土したが、これ以東での遺物出土量は極端に希薄となり、完形土器に至っては配石遺構に伴った 3 点だけである。

<万座北側地区> 環状・方形配石遺構や万座北側の堅穴住居跡群、環状に配置された掘立柱建物跡群が分布する範囲である。3 類土器はこれらの遺構構築時に除かれたかのように、その外周から出土する。地域によっては複数個まとまって出土しているが、その地域は土坑やフラスコ状土坑が密集する地点もある。4 類・5 類土器は、3 類土器と同様の分布範囲となるが、東側の出土量が僅かに 3 類土器より多くなっている。なお、5 類土器の完形品の出土は本地区に偏る。6 類土器の分布は、3 類～5 類土器分布に類似し、その出土量は微増する。

石器・土製品の出土分布に特徴的なものがみられないが、石製品のうち有孔石製品が万座地区・野中堂地区と比較し数量的に多く、これと反比例して棒状石製品は皆無となる。

以上、Ⅲ群 3 類～6 類完形・復元土器の平面分布、石器・土製品・石製品の平面分布を参考に、各地区的ピーク時期を辿ってくと、野中堂地区(3 類土器)から万座地区(4 類土器)、さらに万座地区の一部を含みながら万座北側地区(5 類・6 類土器)へと移っていく傾向が看取された。

1 類：後期初頭の土器で、日廻岱遺跡IV群 b 類・c 類土器、小保内が設定している陸奥大木系土器第Ⅲ段階の中相・新相に相当するものと考えられる。アルファベット文やボタン状貼付文、縄文側面圧痕文の土器を本類(第 95 図 4・5)とした。

山形口縁で長胴又は丸みを帯びた深鉢が主体となる。5 は胴部に文様帶を持ち、方形区画文の上端にボタン状貼付文を貼り付け、そこから隆沈的な手法で J 字状の文様を垂下させる。口唇部に刺突文を連続し、さらに山形口縁から垂下した刺突文は方形区画文の間を通り、その終点にボタン状貼付文を付加する。胴部全面には単節縄文が施文されている。4 は緩やかな山形口縁を呈する深鉢で、口縁部と胴部の区画として隆線文を貼り付け、その上端に縄文側面圧痕文を付加する。山形口縁直下にボタン状貼付文と縄文側面圧痕で方形文を描き、これらを側面圧痕文で連結している。胴部には蛇行文を垂下させ、対峙する弧線文を施文している。

2 類：後期前葉の土器群(第 95 図 6～96 図 12)で、螢沢式、小牧野 3 期土器や榎本が設定した第Ⅱ・Ⅲ様式に相当するものである。

器形は深鉢が主体となる。深鉢は口縁が山形と平縁を呈するもので、平口縁のものは口縁部と胴部の境の屈曲が弱い。文様帶は口縁部と胴部に分かれるものが存在する。地文縄文は全面に施文される。山形口縁を呈する深鉢には折り返し口縁(6)のものもある。文様帶は口縁部と胴部に区画され、波状文や曲線文が施文される。一方、平口縁の深鉢は、器面全域に文様を施文するものと口縁部・胴部文様帶に施文するものが存在し、文様が器面全面に及ぶものは曲線文、方形文、鍵状文等が施文され、一部磨り消しが行われる。また、文様帶が区画されるものは口

縁部の文様帶が幅広く、主文様として巴文が施文される。地文縄文は文様帶に収まる。

本類の遺構は、万座北側台地縁付近で検出した土器埋設炉(8,9)である。

3類：後期前葉、十腰内 I 式古段階の特徴を持った土器群(第 96 図 13～107 図 108)を一括した。榎木が設定した第IV様式に相当するものである。

無文研磨された器面に隆沈線や沈線、これを組み合わせて文様を描く一群である。第 89 図は本類の完形・復元土器の出土分布で、野中堂地区では土坑・フラスコ状土坑密集部とその外周から多く出土した。また、万座地区及び万座北側地区では環状配石遺構群の西側、台地際から出土している。本類土器を出土する遺跡としては赤坂 B 遺跡、塚ノ下遺跡(大館市)等がある。

深鉢、鉢、浅鉢、壺、蓋形土器と変化に富んでいるが、深鉢、鉢、壺が主体となる。

深鉢は波状、山形または平口縁で、胴部の最大径を上半に持つものが多い。器形は胴部から口縁部が緩やかに外反するもの、頸部が屈曲し内湾気味に立ち上がるるもの(15)がみられ、山形口縁のものには貼付文が付けられるものがある。文様帶は器面全体に及ぶもの、胴部下半まで及ぶもの、胴部上半のものがある。文様帶が隆帶や 1～3 条の沈線で区画され、主文様が横位に展開するものや、単沈線で主文様として渦巻文を施文し、文様帶を縦位に区画するものもある。なお、隆帶で区画するものには文様帶が胴部全体・下半まで及び、胴部文様帶が多段化するものもみられる。文様は巴文、入組文、波状文が横位に展開し、弧線文が付加されるものが多い。文様帶が縦位のものは弧線文、沈線文、渦巻文、蛇行文、橢円形文、格子目文等が施文される。

鉢・浅鉢は平口縁が主体となるが、山形口縁を呈するものもみられる。器形は底部から内湾気味に立ち上がるもの、口縁部が垂直に立ち上がるものや外反するものがある。文様帶は器面全体に及び、口縁部と胴部に文様帶を持つものが多い。文様は口縁部に橢円形文を施文し、胴部には入組文、巴文、弧線文のほか、単沈線で波状文や曲線文を施文するもの、花弁状文を施文するもの(77)がある。

壺は平口縁が主体となる。81 のように口縁部が偏った位置につけられるもので、赤色顔料が塗布されている。壺は胴部中央や胴部下半に最大径を持つものがあり、後者は隆帶によって文様帶が区画される。文様帶は隆帶のほか、1～3 条の平行沈線で区画され、主文様が縦位に展開するものは大型・中型の土器に見られる。文様は巴文、渦巻文、波状文、入組文、蛇行文、橢円形文、弧線文等である。

蓋形土器は、三角錐形と盤状のものがあり、刺突文や沈線、これを組み合わせた文様が施文される。

4類：後期前葉の土器で、十腰内 I 式新段階の特徴を持った土器を一括(第 108 図 109～120 図 224)した。榎木が設定している第V様式に相当し、「大湯式土器」と呼ばれる土器群は本類に含まれる。磨消縄文によって文様が描かれる一群である。第 92 図は本類の完形・復元土器の出土分布で、本群 3 類土器と類似する分布状況を示すが、野中堂地区からの出土量は減少している。本類土器を出土する遺跡として居熊井遺跡、萱刈沢 I 遺跡・II 遺跡(能代市)等がある。

深鉢、鉢、壺、片口、注口、台付土器と変化に富んでいるが、深鉢・壺が主体となる。

深鉢は山形・波状・平口縁がみられ、頂部に刻みを有するもの(110、115)がみられる。胴部上端に最大径を持ち、口縁部が緩やかに外反するものと大きく屈曲するものがある。文様帶は 2～4 条の平行沈線で口縁部と胴部上半に区画され、口縁部から胴部上半までを一つの文様帶とす

るものがある。主文様として波状文、入組文、クランク状文、渦巻文、弧線文、花弁状文が施文され、口縁部文様帯にも同様の文様が施文されるものがある。クランク状文や花弁状文が本群3類土器より多くみられるようになり、文様帯が多段化するものもある。沈線に沿って刺突文を施文するもの(145)が出現する。縄文は文様帯内に限定されるが、文様帯下に地文を残すものもある。

鉢は、山形・波状口縁を呈し、頂部に刻みを有するものがみられる。底部に低い高台を持つものが現れ、胴部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反するものがある。文様帯は器全面に及ぶものが多く、主文様として巴文、入組文、波状文、クランク状文、花弁状文が施文され、166のように器外面と内部底面に花弁状文を施文するものがある。

壺は、本群3類土器に比べ広口のものや長頸のものが多くなる。小さな山形口縁や波状口縁を呈するものがみられ、頂部に刻みが入れられるものがある。胴部中程に最大径を持つ球状・長胴のものと胴部下半に持つものがある。文様帯は172のように隆帶で区画されるものもあるが、2~3条の帶縄文によって胴部上半に区画されるものが多く、底部付近まで広がっているものもある。主文様として波状文、入組文、クランク状文、弧線文、花弁状文等が施文されるが、花弁状文が施文される割合が深鉢・鉢よりも高い。縄文は文様帯内に集約されるが、沈線間を条痕文で充填するものもある。

片口土器の文様帯は胴部上半に限定され、2~3条の平行沈線で区画される。主文様として入組文、円形文、花弁状文が施文される。縄文は文様帯内に収まり、単節縄文が施文される。

5類：後期前葉と中葉を繋ぐ土器群(第121図225~123図238)である。榎木が設定した第VI様式に相当するものである。多重沈線によって文様が施文されるもの、帶状文が本群4類土器と比べ幅広くなるものを一括した。器形・文様は本群4類土器と比べ大きな変化がみられないが、多重沈線のものは本群4類土器と比べ沈線の幅が細く、断面が鋭利になるという特徴がみられる。本類土器を出土する遺跡として居熊井遺跡(後期III群1類e種)がある。

深鉢、壺形、片口がみられるが、深鉢が主体となる。

深鉢は、本群4類土器と同様に口縁部と胴部上半の文様帯に区画されるが、230、234のように胴部下半まで及び、多段化するものもある。文様帯には入組文、弧線文、方形文、クランク文等が施文されるが、235のように胴部に単節縄文を残し、口縁部に楕円形文を配し、刺突文を充填するものもある。

壺は、胴部中央に最大径を持ち、全体的に丸みを帯びた広口のものがみられる。文様帯は深鉢と同様に胴部上半に区画され、多重の弧線文が施文される。

片口土器(238)は長胴で底部付近に最大径を持ち、口縁部は大きく外反する。文様帯は口縁部に限定され、ウロコ状に多重の弧線文が施文される。沈線は本群4類土器より幅は細く、細かな単節縄文が施文されたのちに描かれる。胴部には回転方向を変えた羽状縄文が施文され、この手法は片口に多く用いられる。焼成は良好で赤褐色・黒褐色を呈する。

6類：多重沈線、入組文系・幾何学文系(第123図239~128図290)のもので、後期中葉の土器を一括した。東北北部の十腰内II式・III式、東北南部の宮戸IIa式、宝ヶ峯式、関東地方の加曾利B1式・B2式の特徴を持つものである。本類土器を出土する遺跡として赤坂A遺跡、中小坂遺跡(小坂町)、小坂環状列石墳墓遺跡がある。

a：多重沈線が主文様となる。沈線は本群 5 類土器と比べ幅広く、浅くなる。器形は深鉢、鉢、有孔土器で、深鉢が主体となる。深鉢は、山形口縁を呈するものやひねりを加えた耳状把手を貼り付けるものがある。胴部と口縁部の境が「く」の字状に屈曲し、口縁部は僅かに内湾しながら大きく外反する。口唇部が肥大化する特徴を持つ。沈線は口縁部と胴部上端に限定・施文され、蛇行文や弧線を付加し楕円形的な要素を持たせるものもみられる。

鉢は、底部から胴部が曲線的に湾曲して立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。沈線は口縁部上端に限定されるが、稀に胴部下半まで及ぶものがある。

有孔土器は、本類土器の特徴的な器形である。筒形を呈し、底部付近に孔が穿たれる。沈線は 4 条で、文様帶は多段化する。深鉢や鉢と同様に蛇行文や弧線を付加するものがみられる。地文として節の細かな単節縄文が施文され、沈線外は磨り消しがある。土器は赤黒褐色、黒褐色を呈し、特徴的である。

b：幾何学文、入組文、巴文等を施文した土器を一括した。深鉢、鉢、壺、有孔、注口がみられ、深鉢が主体となる。

深鉢は大きな装飾突起が付けられ、文様帶は器面全面に及ぶ。装飾突起を持つ深鉢はすべて台付となり、小さな胴部と大きく湾曲した口縁部が特徴的である。文様帶は口縁部と胴部に区画され、入組文や変形円文が主文様として施文される。文様内には細かな縄文のほか、262 のように地文のないものが稀に見られる。沈線に沿って連続する刺突文を付加するものもある。

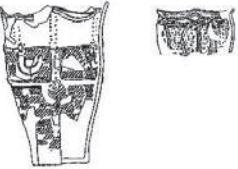
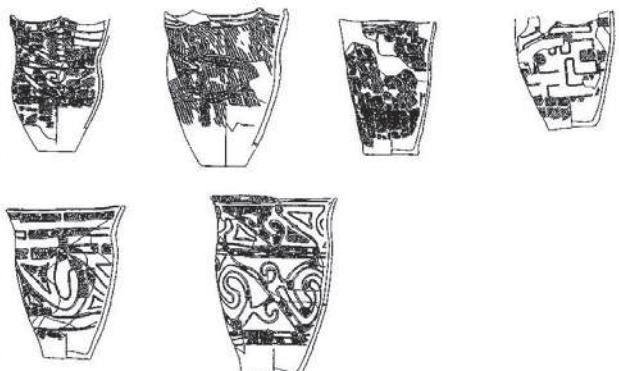
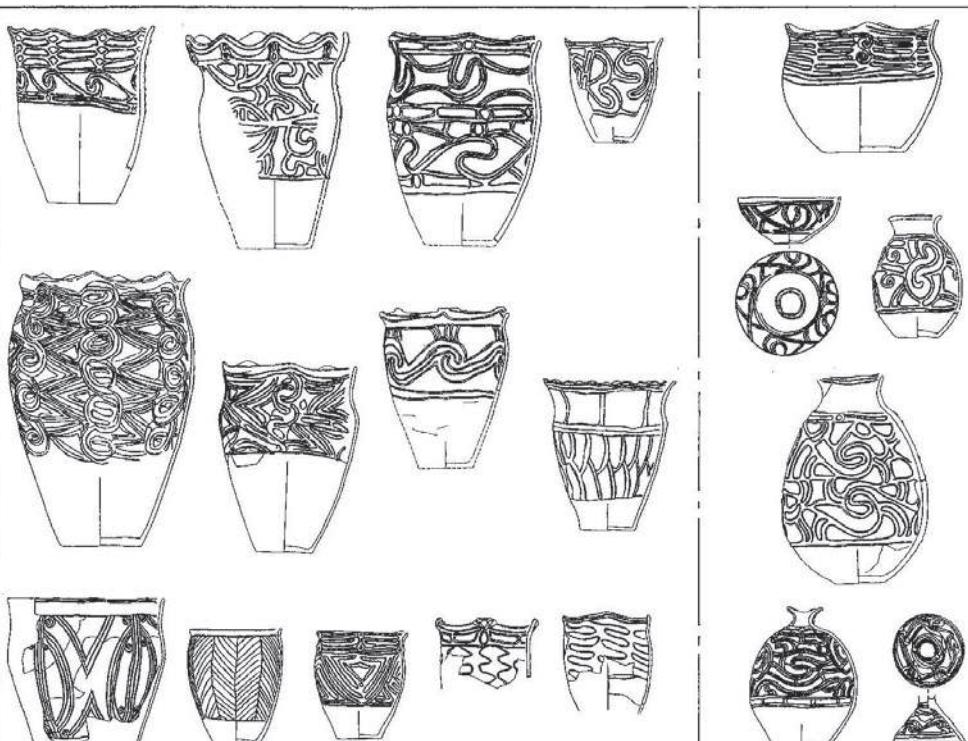
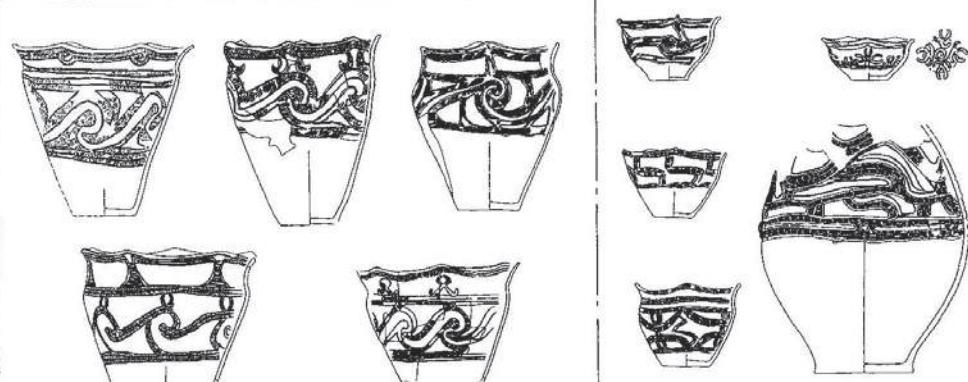
鉢で復元されたものは 263 のみである。文様帶は口唇部と底部付近の帶縄文で区画され、横位に展開する入組文が施文される。

壺は、広口タイプのものが主流を占め、球体状を呈するが、長胴やソロバン玉のような器形も存在する。文様帶は胴部全面に及んでおり、主文様として入組文、波状文、巴文、連弧文、鋸歯文、蛇行文等が施文される。沈線間には細かな単節縄文が施文されるが、276 のように短刻線を充填するものや無文研磨するものもある。

有孔土器は、前述したように本類に特徴的な土器である。筒状を呈し、口縁部と胴部の境がないもの、口縁部が外反するものの 2 タイプがある。文様帶は胴部全面に及び、多段化する。主文様として木葉文(向かい合い、連続した弧線文)・入組文・楕円形文を数段施文する。

注口土器は、壺形タイプと浅鉢タイプに注ぎ口が付く形態がある。さらに前者は胴部がソロバン玉の器形を呈するものと底部の広い器形を呈するものがある。文様帶は胴部上半に限定されるものと器面全面に及ぶものがある。主文様として弧線文や入組文が施文されるが、288 は彫刻的な手法を用い、全体を研磨し、文様全体を浮かび上がらせるものである。焼成も良好で、黒褐色を呈するものが多いことが特徴である。

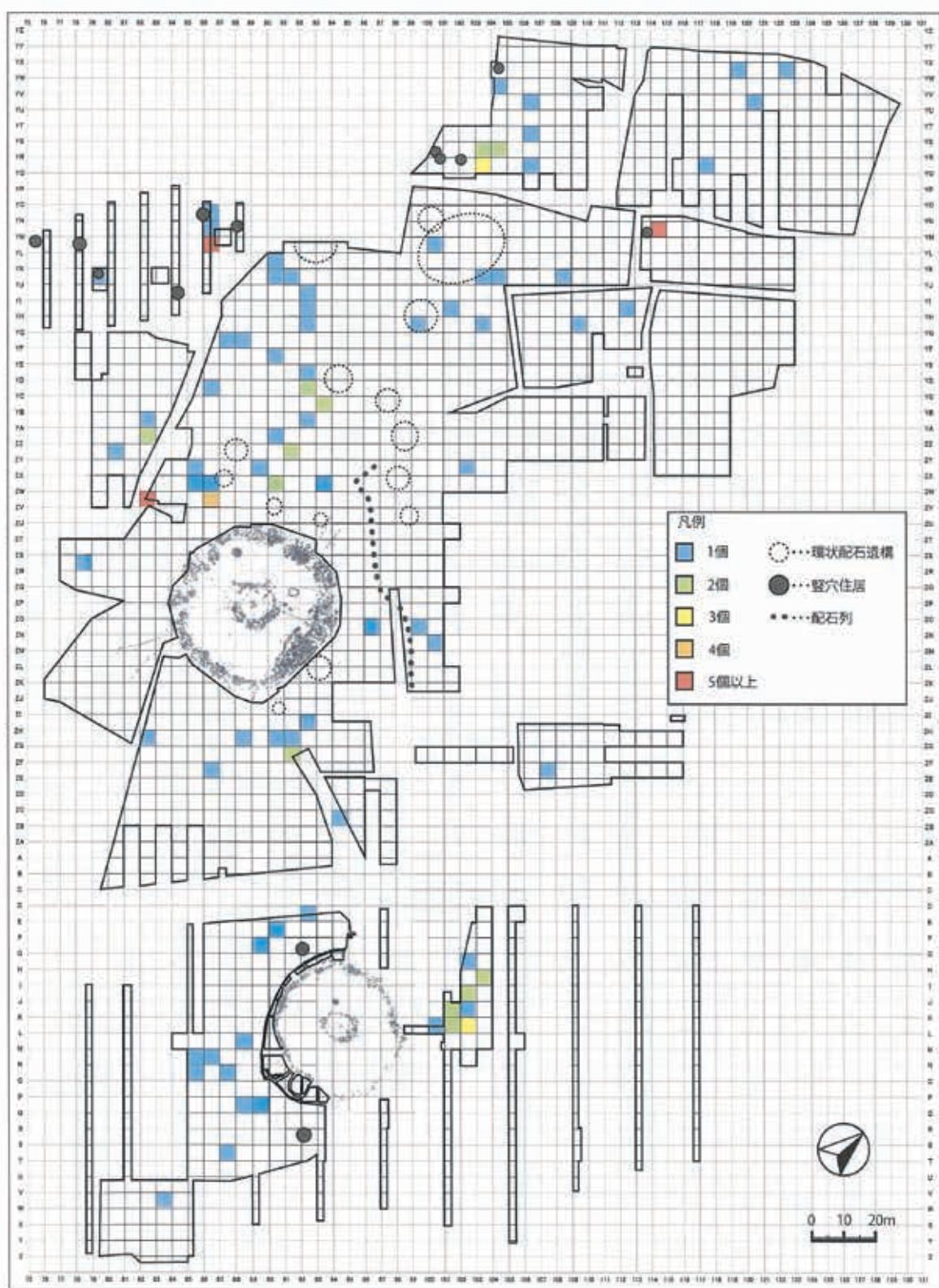
本類土器は、後期中葉の特徴を持った土器群で、本類 a は北東北の十腰内 II 式、宮戸 II a 式、関東の加曾利 B1 式・B2 式に、本類 b は十腰内 II 式、宝ヶ峯式土器に並行するものである。

III 群 1 類	日廻岱 IV群 b類 c類		
III 群 2 類	螢 沢 式		
III 群 3 類	十 腰 内 I 式 古 段 階		
III 群 4 類	十 腰 内 I 式 新 段 階		

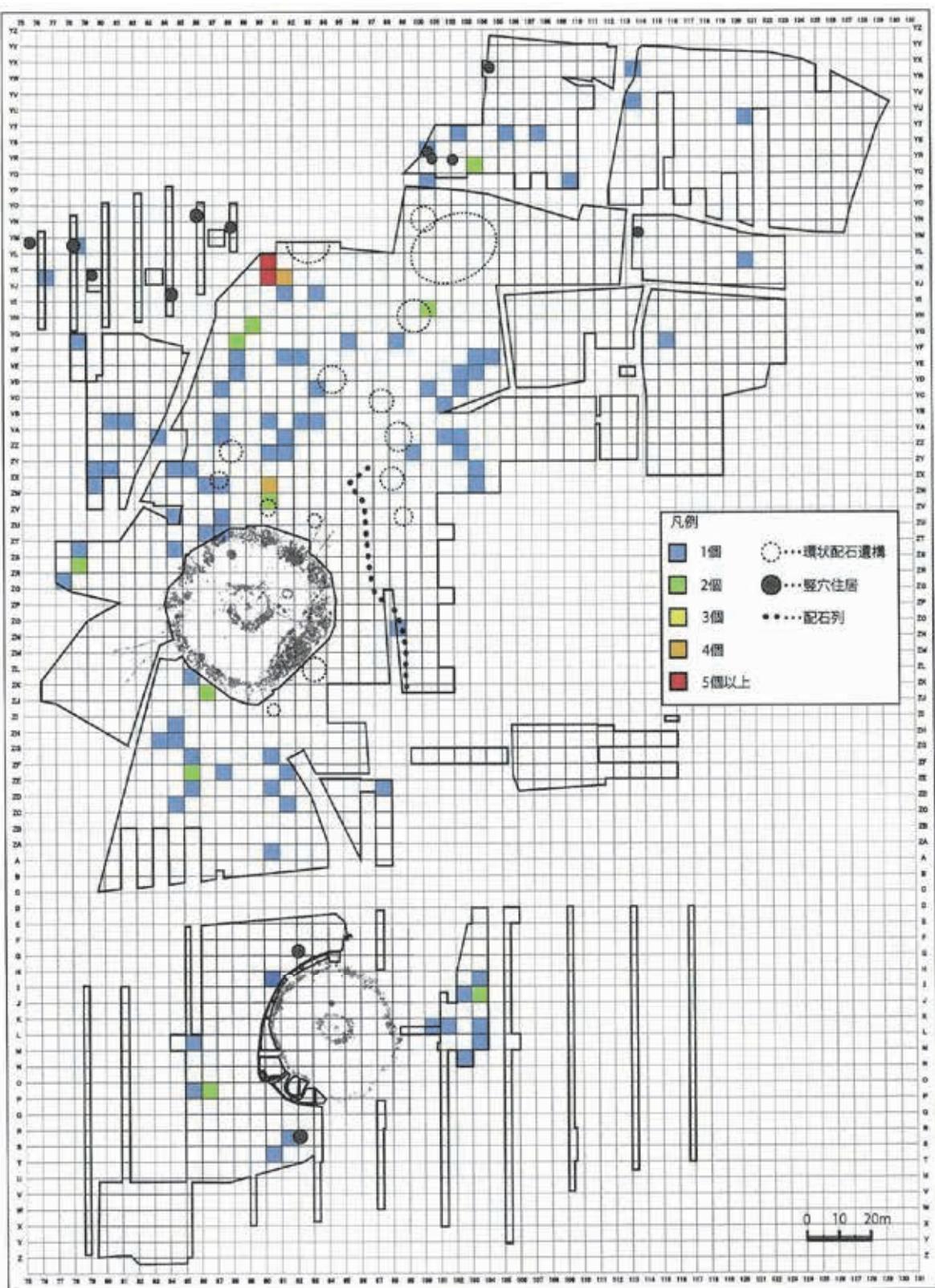
第 89 図 後期土器編年 (1)

III群 4類	十腰内I式新段階	
III群 5類	居熊井第III 1e	
III群 6類	十腰内II・III式	

第90図 III群土器の編年(2)



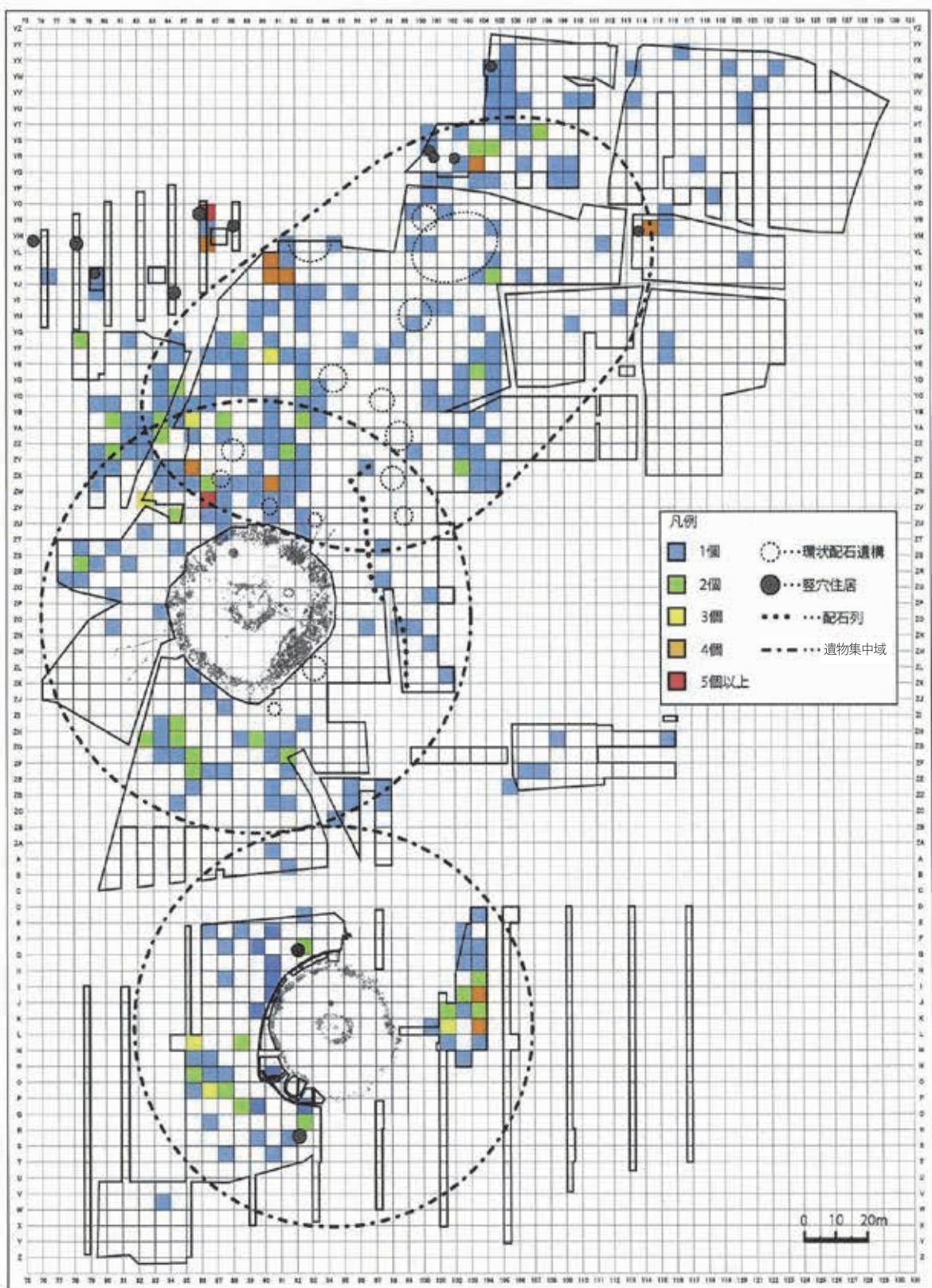
第91図 III群3類土器の分布状況



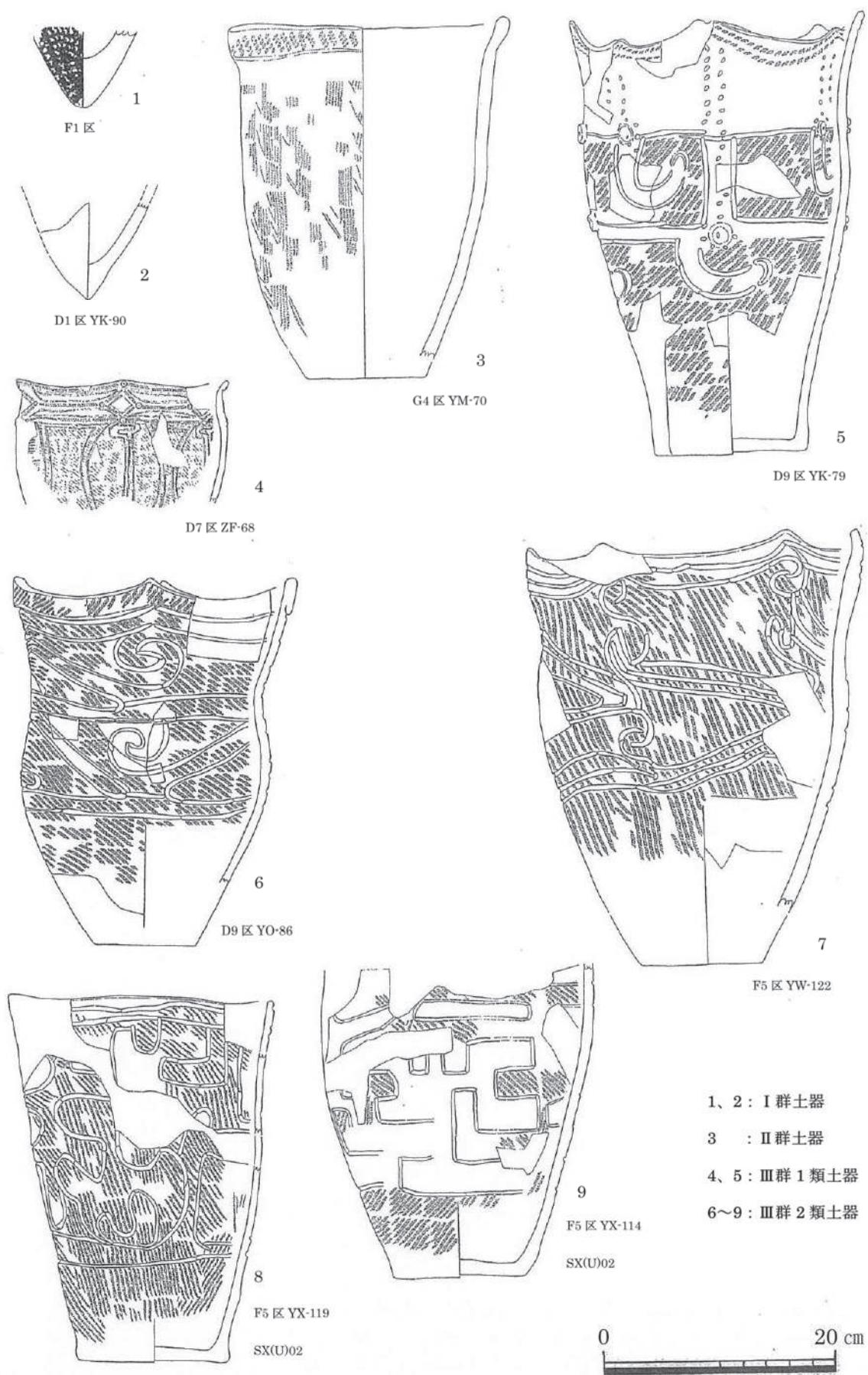
第92図 III群4類・5類土器の分布状況



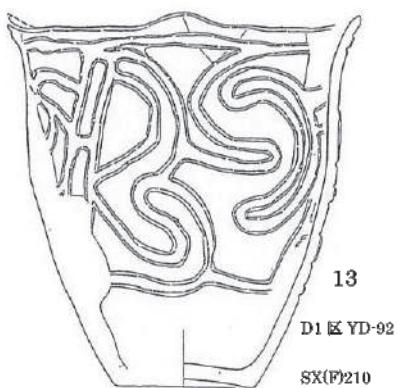
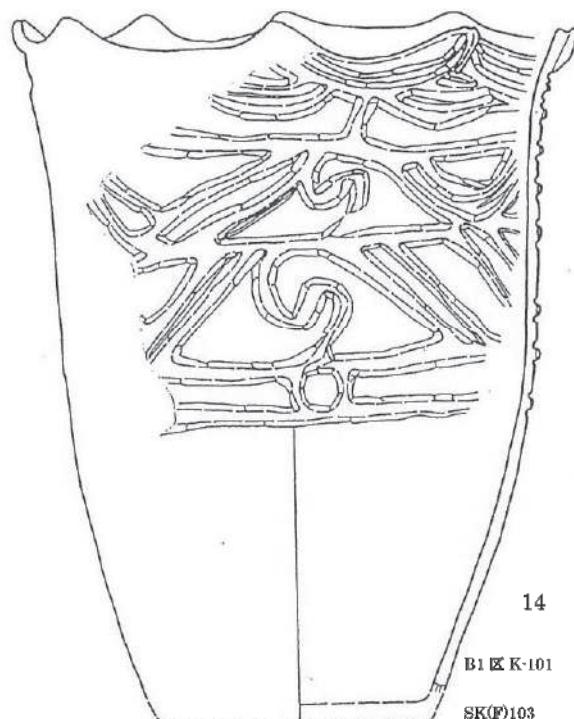
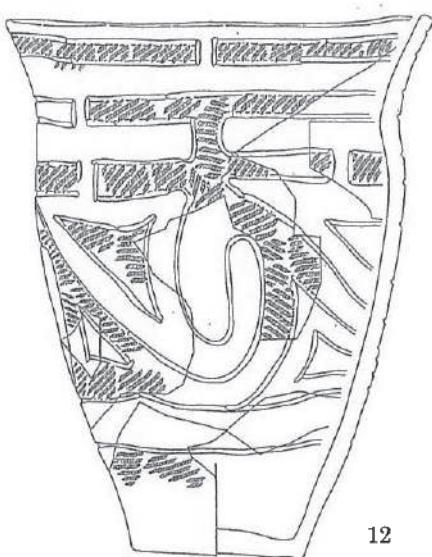
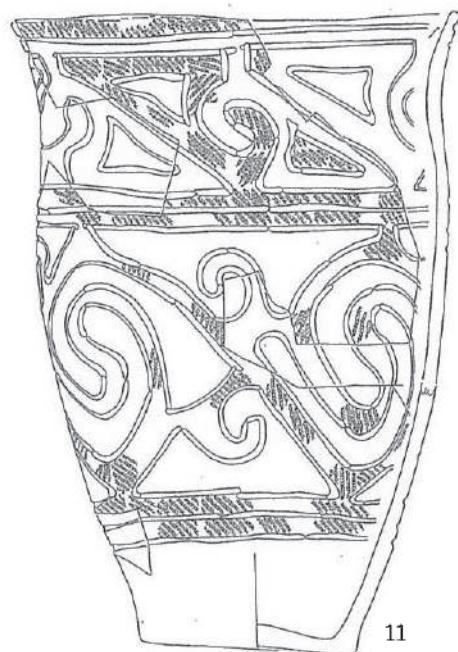
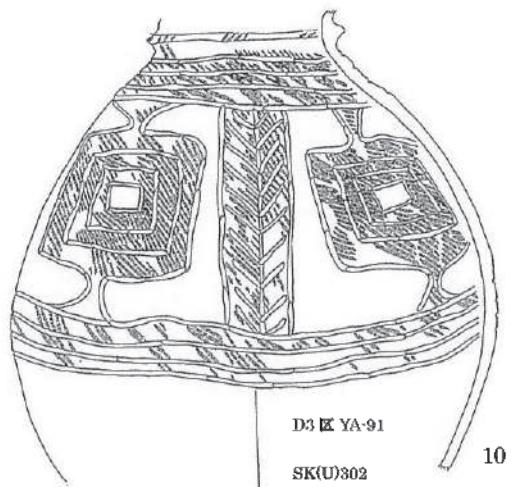
第93図 III群6類土器の分布状況



第94図 III群土器の分布状況



第 95 図 出土土器(1)

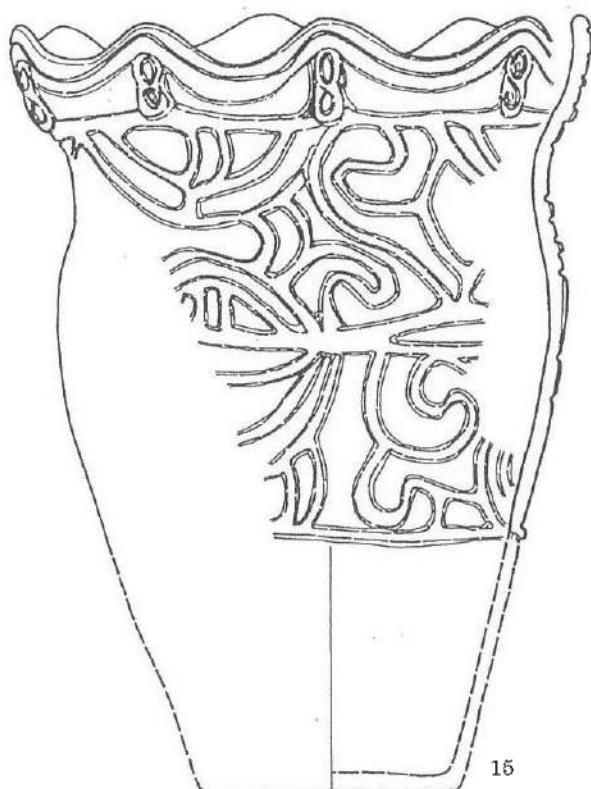


0 20 cm

10~12 : III群 2類土器

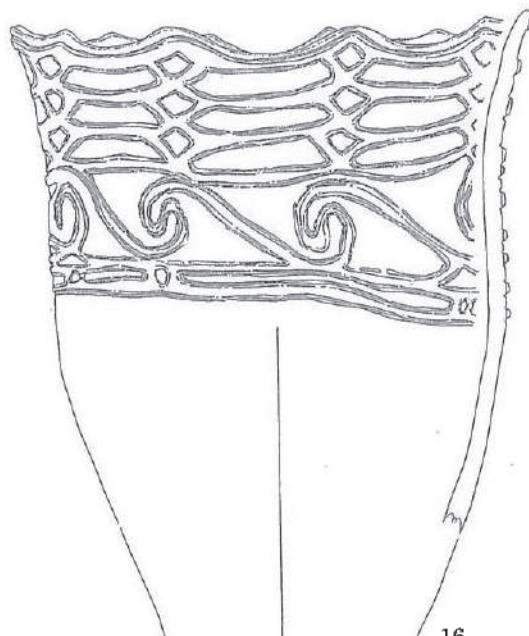
13~14 : III群 3類土器

第 96 図 出土土器(2)



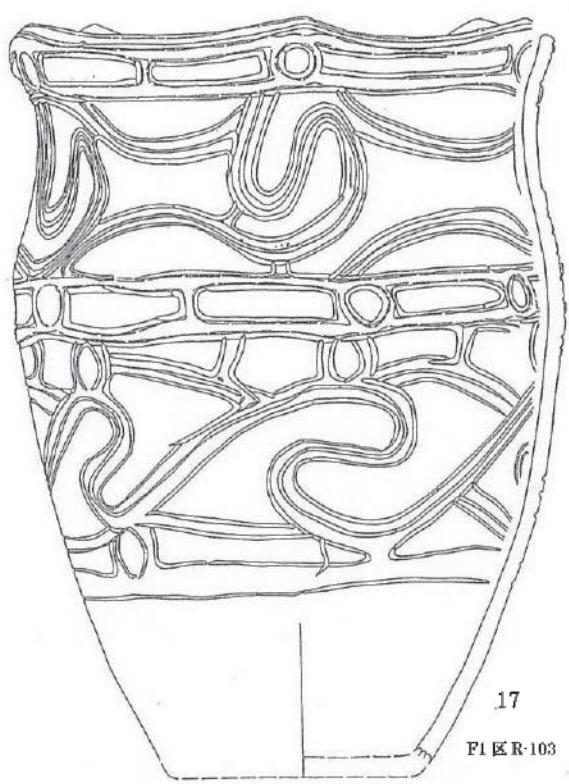
15

B1 区 J-102



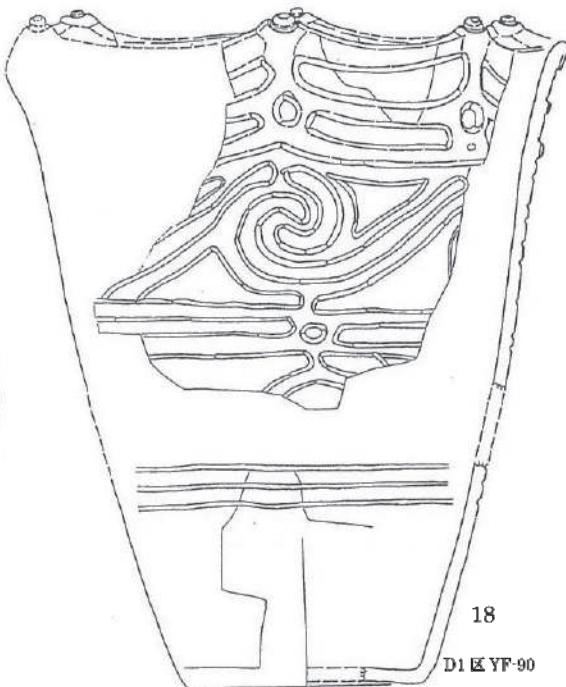
F5 区 YR-117 SK(F)8

16



17

F1 区 R-103



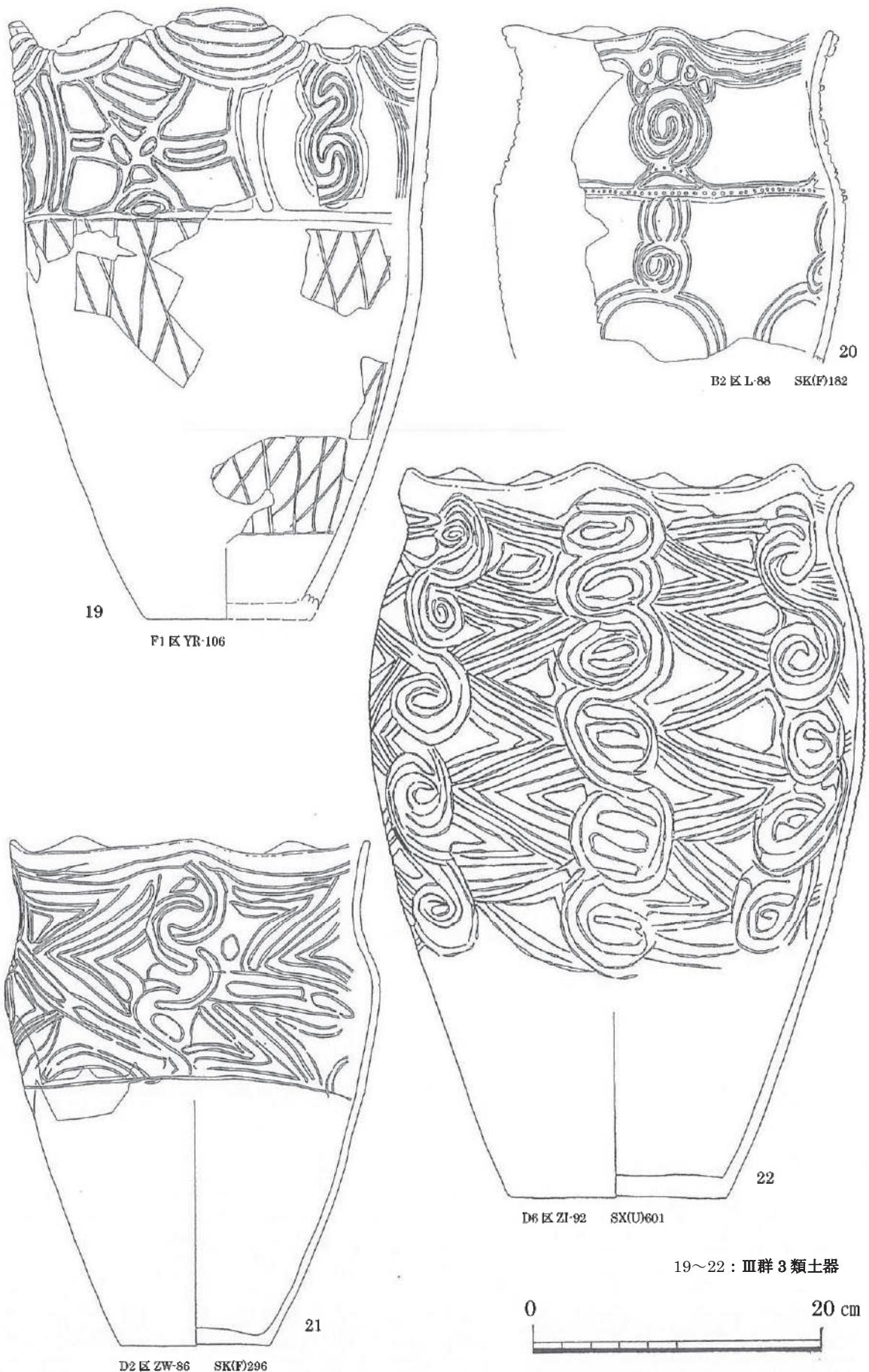
18

D1 区 YF-90

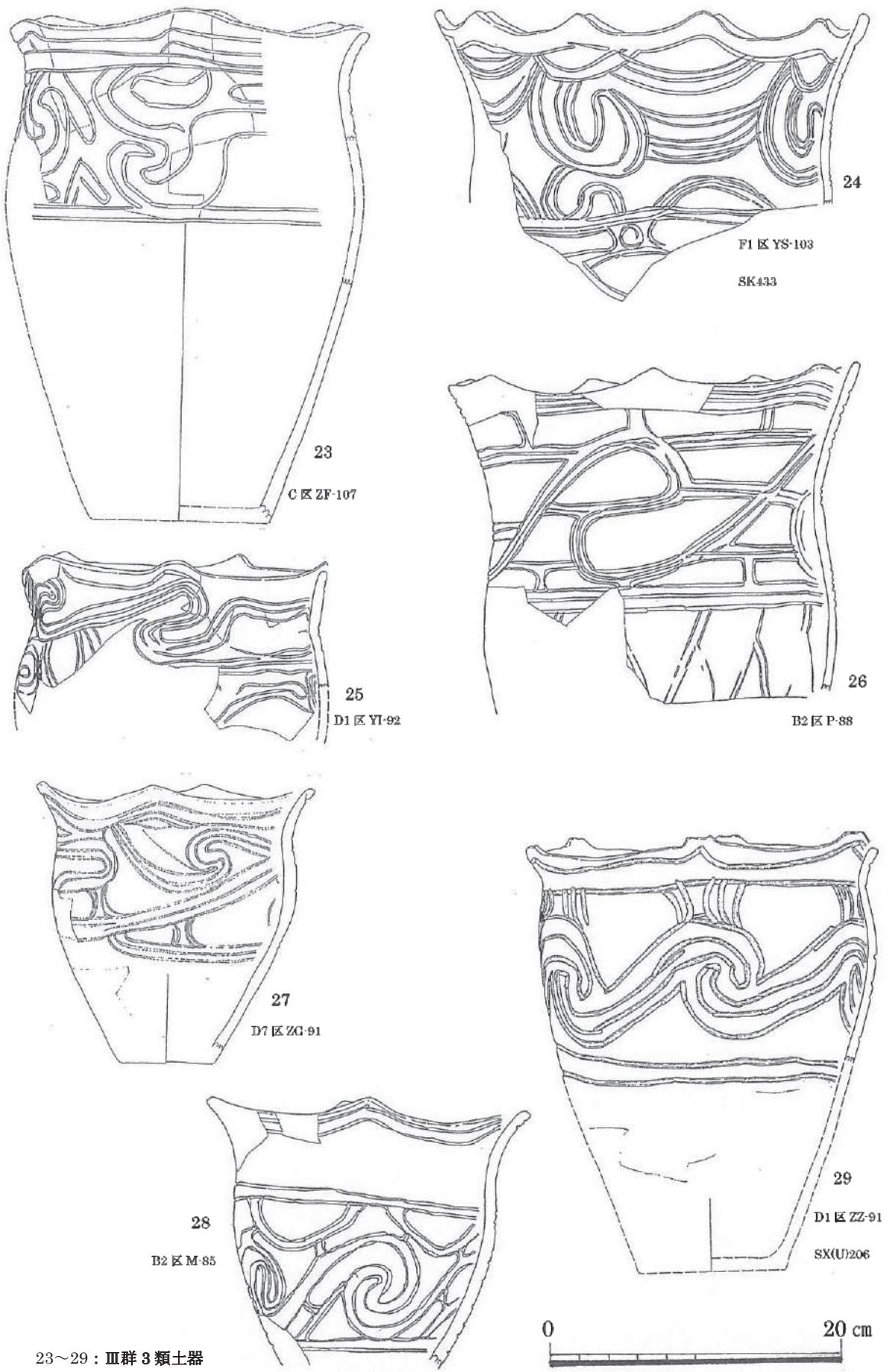
13~18 : III群 3類土器

0 20 cm

第 97 図 出土遺物(3)

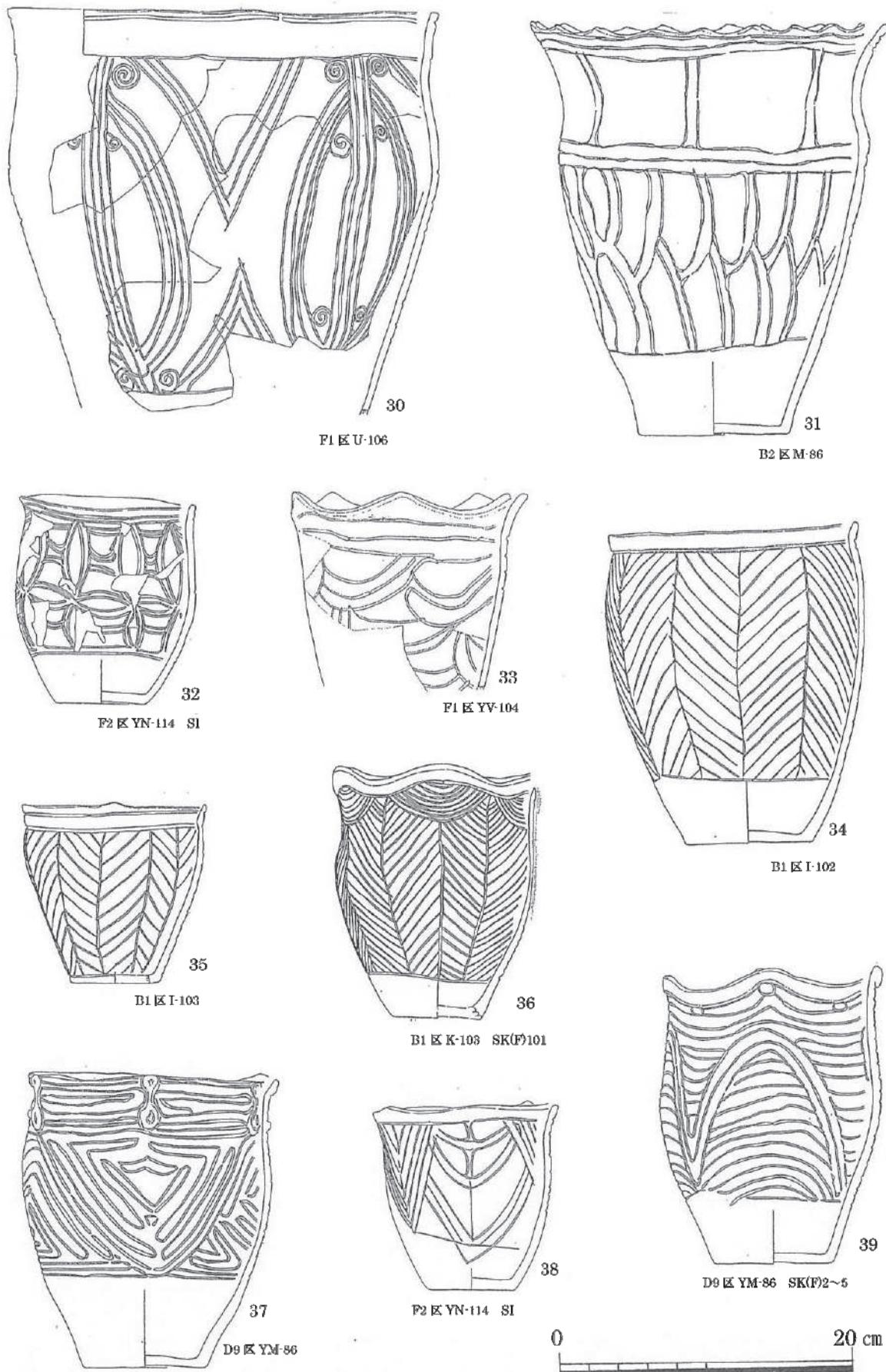


第98図 出土土器(4)



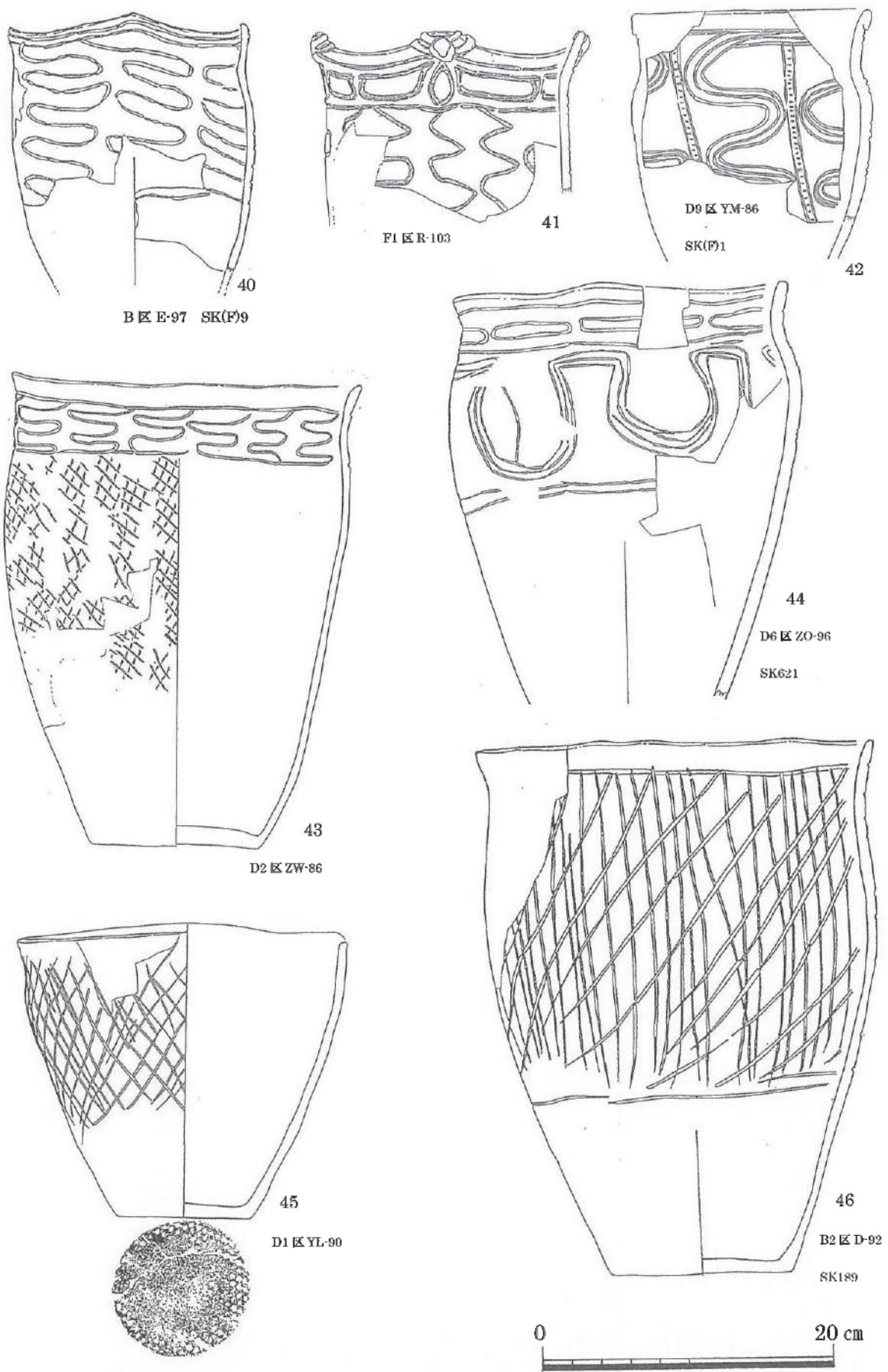
23~29: III群 3類土器

第99図 出土土器(5)



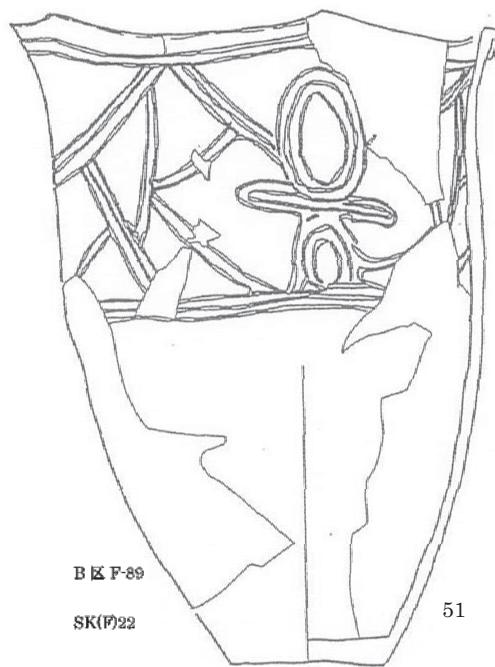
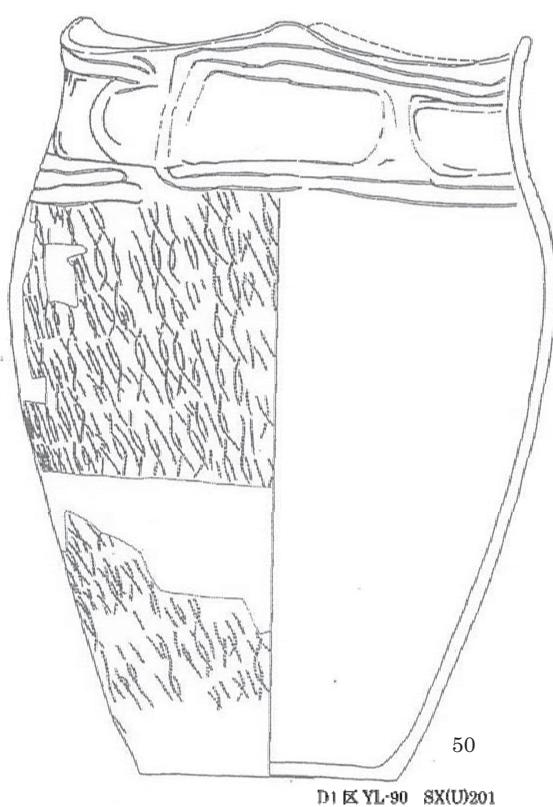
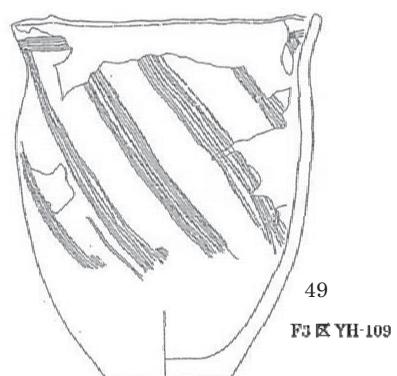
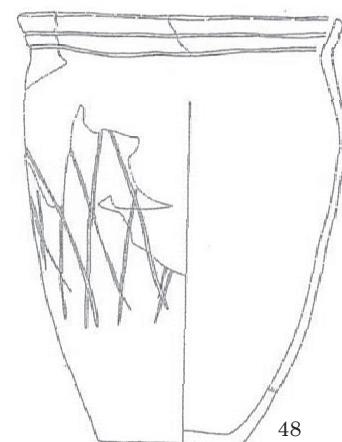
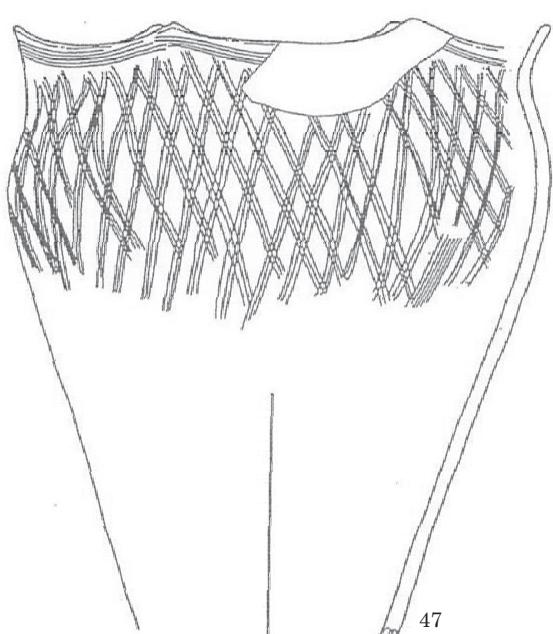
30~39 : III群 3類土器

第 100 図 出土土器(6)



40~46 : III群 3類土器

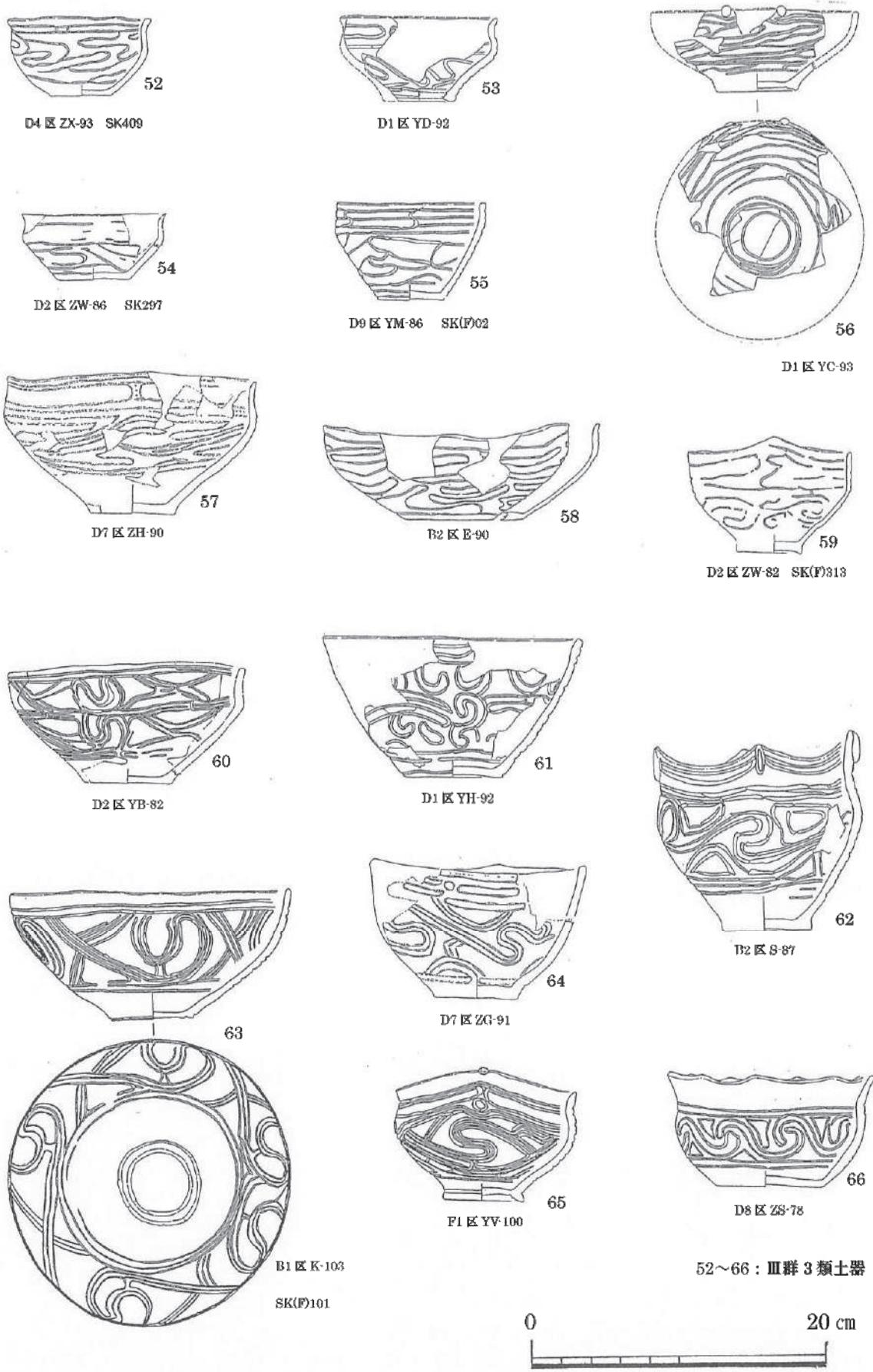
第101図 出土土器(7)



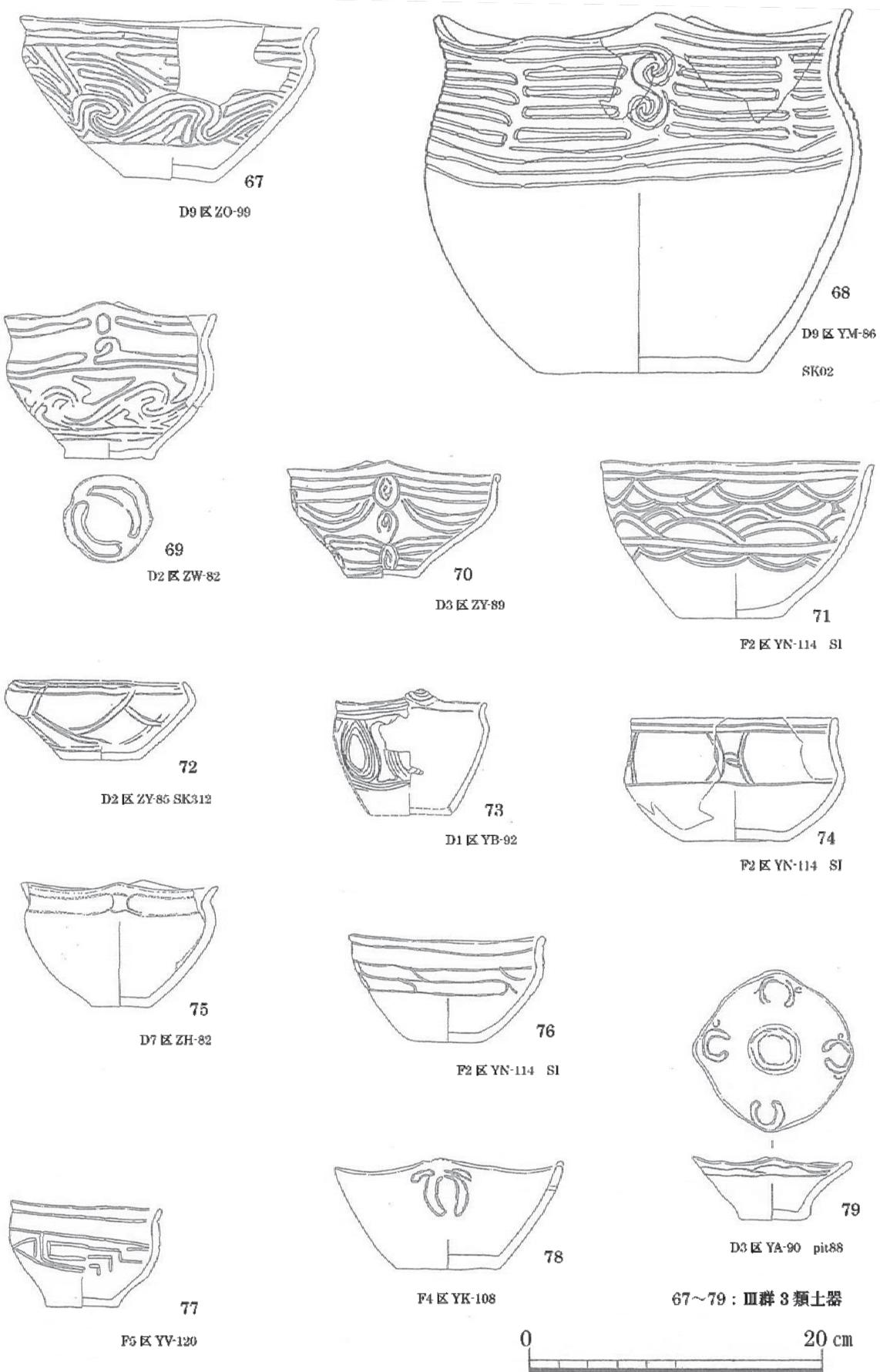
47~51 : III群 3類土器

0 20 cm

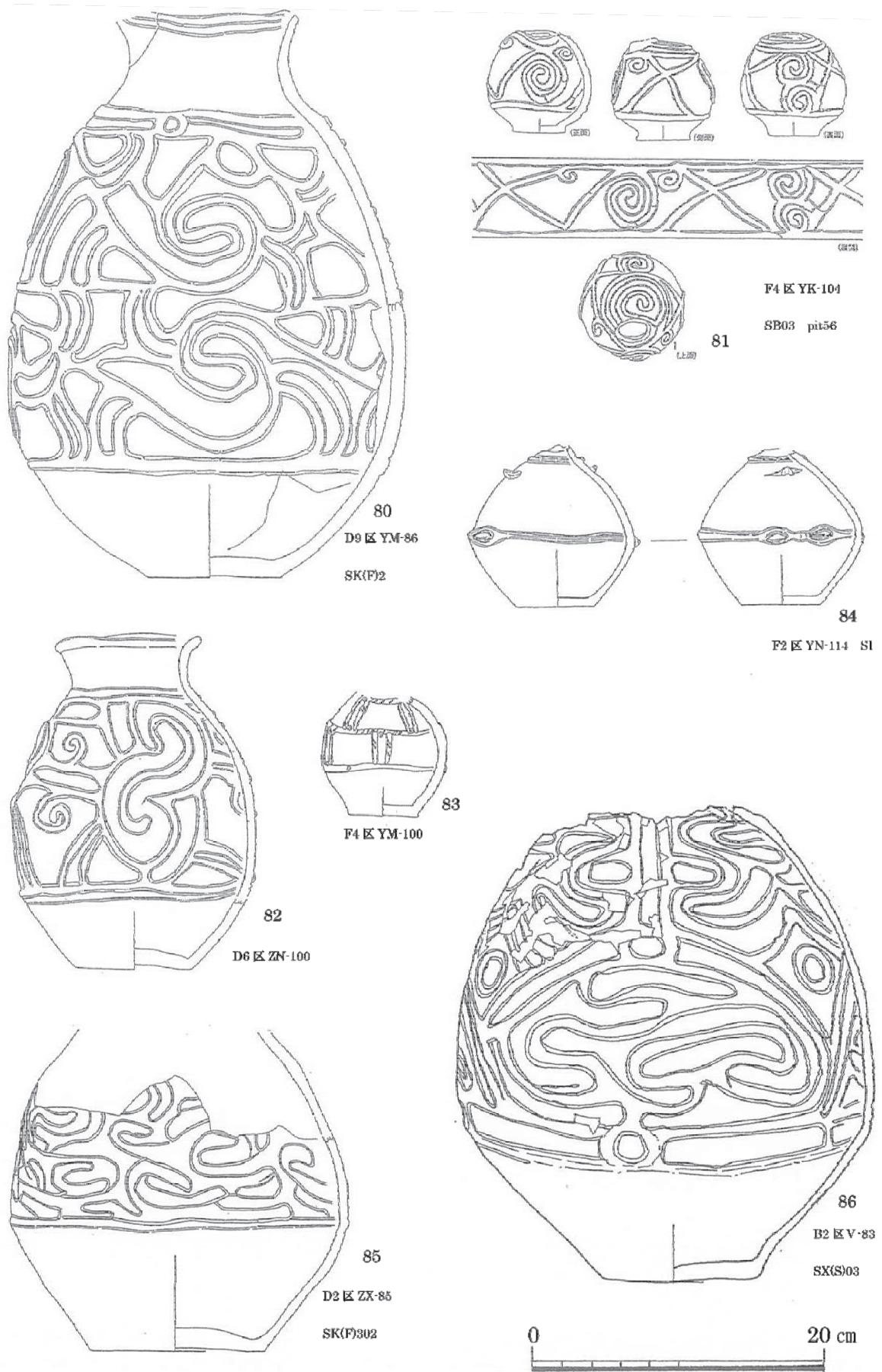
第 102 図 出土土器(8)



第103図 出土遺物(9)

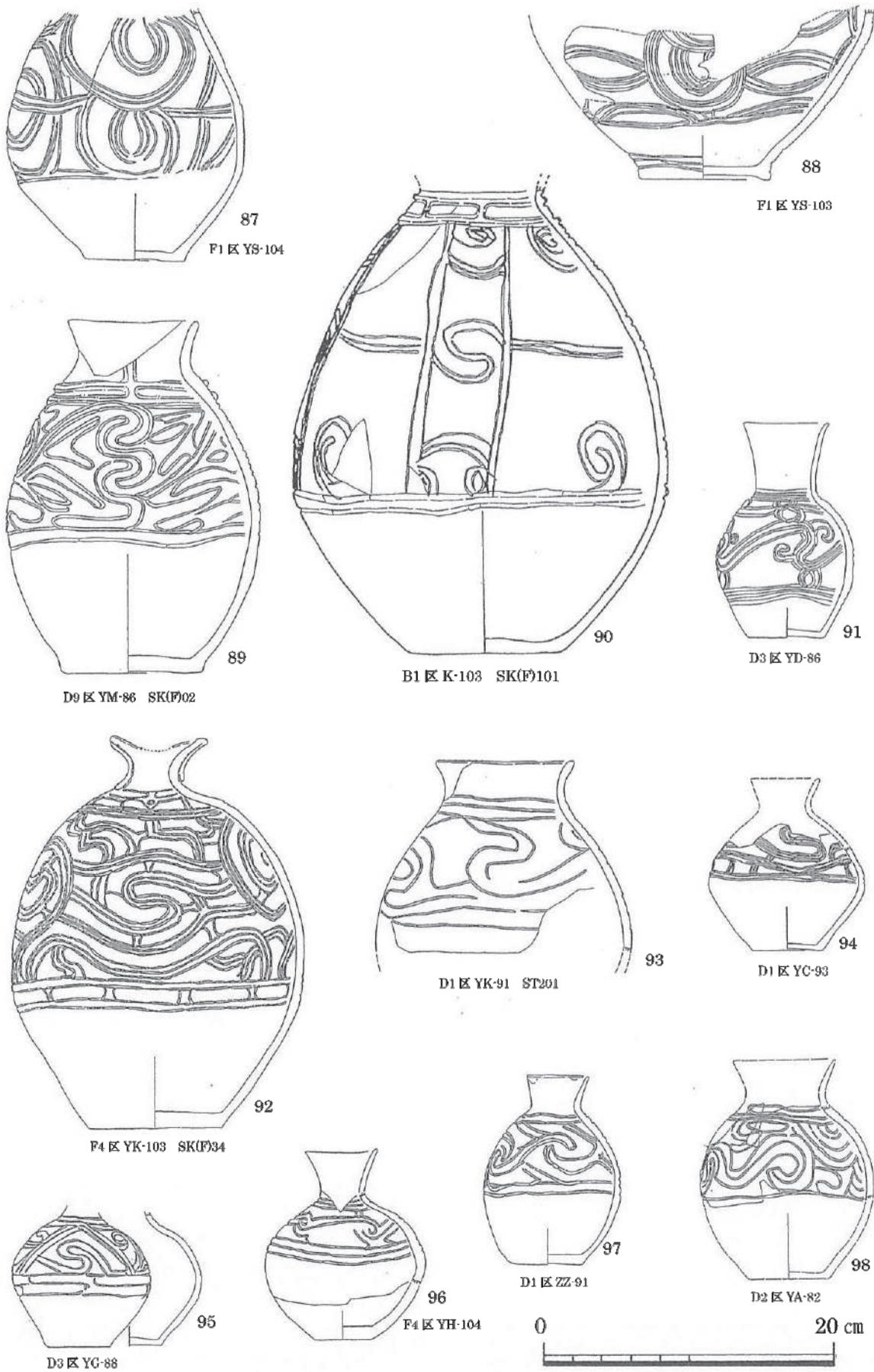


第 104 図 出土土器(10)



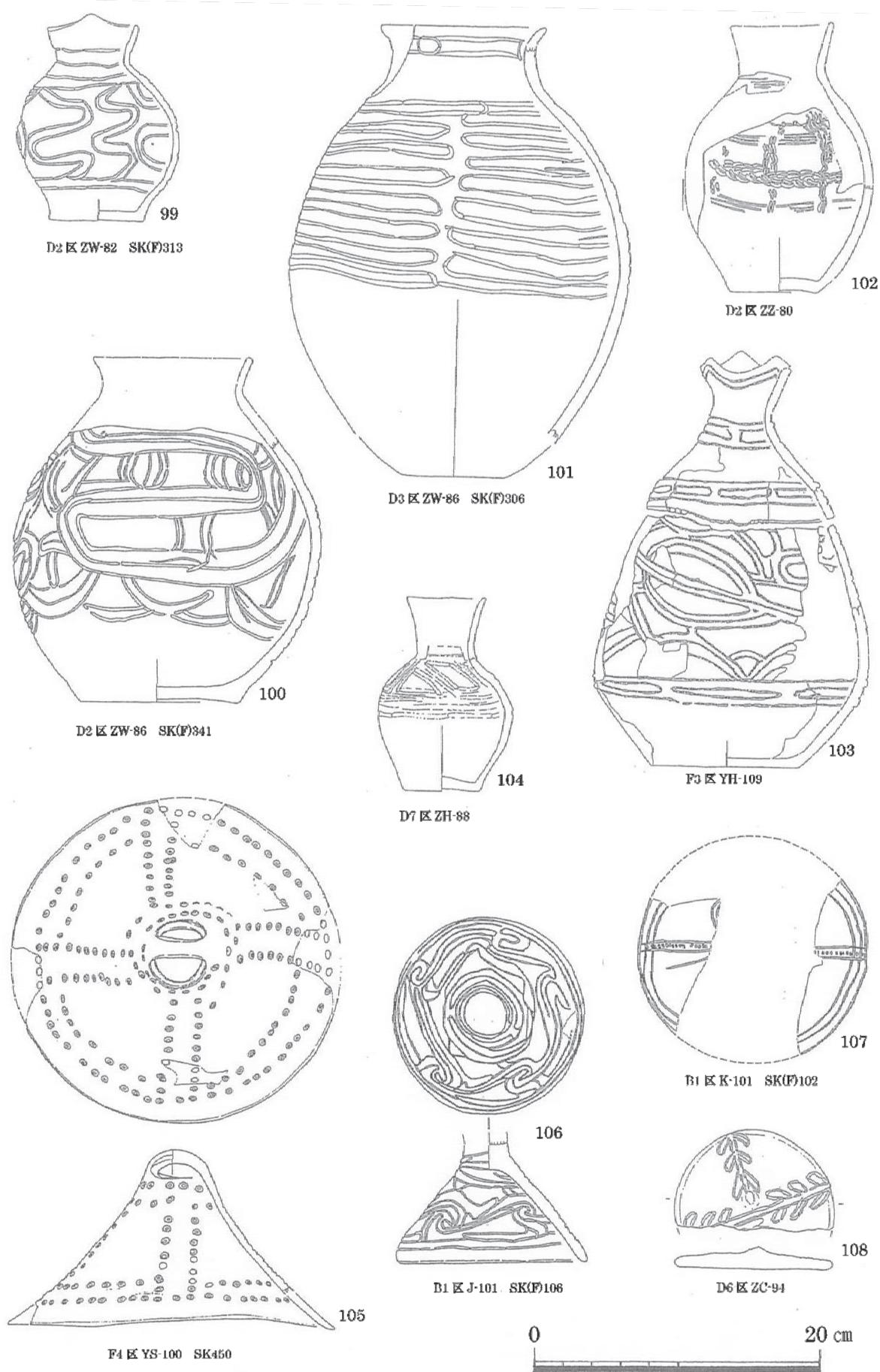
80~86：Ⅲ群 3類土器

第 105 図 出土土器(11)



87~98：Ⅲ群 3類土器

第 106 図 出土土器(12)



99~108 : III群3類土器

第107図 出土遺物(13)